

2016 vol.35 春号 源流からのたより

ぽたいたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」⑩
- ・源流の主役たち
- ・土倉翁造林頌徳記念碑
- ・川上村がユネスコエコパークになります
- ・源流学の森づくり



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

紀の川(吉野川)流域における

協働取組加速化事業の報告

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大

平成27年度もまもなく終了。今年度も駆け抜けてきました。その中で試みたチャレンジがあります。

環境省の「地域活性化に向けた協働取組の加速化事業」において、全国17のモデル取組の一つに、本財団が申請した「紀の川(吉野川)流域における地域産業をESDの視点でいかす教材化」が採択されました。ESD (Education for Sustainable Development) とは簡潔に言えば、「持続可能な社会づくりの担い手のための教育」です。紀の川がつなぐ林業、農業、漁業にまつわる「恵み」「技や知恵」「ひと」などに素材を見出し、教材化のヒントを提案し、流域で活用することで、自然とともにある産業の持続と活性化につなげていこうとするものです。そしてこの事業の目標は、いかに流域の多様な主体と協働し、取組むかということでした。

当初、「ESD」は、あまり耳慣れない言葉でした。取組では流域の自治体・教育委員会、環境活動グループ、企業、



全国報告会にて、上流・中流・下流のメンバーで報告

林業・農業・漁業の従事者、学校の先生や博物館の学芸員など多様な団体へのヒアリング、また森、大地、海で行ったワークショップなどの結果、いまでは「ESD」という言葉が流域の課題解決につながるような期待感をもって、それぞれの方から出るようになりました。この過程では、紀ノ川農協宇田組合長やしらす漁師の高井氏など流域のキーパーソンや吉野川紀の川流域協議会に役割を担ってもらいました。

もともと、このメンバーはイベントのときに物産展などの交流を行ってききましたが、今回の事業で、さらに密に出会い、雑談も含めたディスカッションを重ねる「やり方・動き方」へと深まりました。

流域と言うものの、となりの地域や、川の流れていくところ、流れてくるところのことは知らない。教えてもらいに訪ねて行ける知り合いもない。このことを今回多くの人と共感しました。学校の先生も大変困っておられました。実は吉野川紀の川流域協議会でも同じ状況でした。協議会とは少しずつ協働の接点を設けた結果、協議会事業にも大いにメリツトがありました。

ESDの推進にはボトムアップとトップダウンの両方が必要と教わりました。産業・企業・活動グループ・消費者などの思いによるボトムアップ。トップダウンが必要なとき流域協議会の12市町村の関係づくりが大切になるといふねらいがありました。

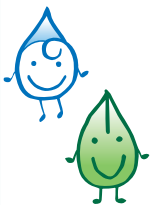


和歌山内の小学校にて先生を対象に意見交換

「ESDの視点をいかした教材」とは、もつと流域を知る、人と出会う、話すための機会づくりこそが、有効な「教材」として、この協働チームから提案すべきという合意形成ができました。

2月6日に東京で全国の採択団体による報告会に参加。奈良県と和歌山県の県を超えた協働取組、また流域12市町村からなる「吉野川紀の川流域協議会」も巻き込んだ協働取組として注目をされました。

今年度の重点課題とした、真の流域連携への第一歩を踏み出したことを実感しています。



東

日本大震災から早いもので5年を迎えたが、復興もまだまだ道半ばと聞く。ここ川上村

でも、忘れられない災害があった。今から57年前の1959年（昭和34年）の9月、襲来した台風によって、未曾有の大被害を被った。気象庁は伊勢湾台風と名付け、死者と行方不明者は5098人のぼった。わしが26歳の時である。まだ結婚はしてなかった。当時の日記に、「あまりの被害の大きさに、村の復興は見込みがない。村を出ることを考えなければいけない」と記してある。ライフラインは全滅、道路はずたずた、山はいたる所で崩壊していて、何をしたらよいか、気持ちが悪転していて、落ち着くまで時間がなかった。

当

時、わしは村の消防団員だったので、台風の夜は夜警に出

ていて、家に帰ったのが朝方であった。幸い、わしの集落である柏木地区は被害が少なくすんだが、隣の集落の上多古が大変なことになる。と知っている。知らせがあったので、あわてて行ってみると、びっくりした光景が広



上多古



上多古

がっていた。川は大洪水、国道の上まで水が上がったのか、その痕が残っていた。上多古の親戚の人たちは避難したのか誰もいなかった。家の中も水に浸かった形跡があり、洪水の大きさが物語っていた。今まで見たことのない光景は、今でもはっきり記憶に残っている。すぐに避難している親戚の家へ行ってみると、これまた大変なことが起こっていた。親戚の子どもと、その子を背負って避難した2人が川に流され、行方が分からなくなったが、川は増水していてどうにもならない状態であった。

方、わしの仕事仲間であった友人が流され、助かったも

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」

⑩伊勢湾台風



の、片足に大きな怪我をして、苦しんでいた。一刻も早く、迫地区にある診療所につれていくことになり、わしら5〜6人で戸板を作り、怪我をした友人を乗せて、診療所へ歩いて向かった。しかし道路は寸断され、谷は増水していたので、大変だった。普段、自動車だと15分あまりの道のりが、国道から山を登ったりしながら、人知地区に着いたのが昼頃であった。人知の区長さん宅で一服させてもらい、裏の畑にあった、キンカントマトを出してくれた。そのトマトのおいしかったこと。今でもその味を忘れはしない。

し かしその先が大変だった。高原川の増水で橋が流失していた。幸い、対岸の白屋地区にかかってるつり橋が残っていたが、危険なため通行止めになっていた。しかし迫地区に行くには、この橋を渡るより方法がなかった。で、みんなで相談して、「どんな結果になっても仕方ない。もし、落ちた時は、あきらめるより仕方ない」と、全員覚悟を決めて渡った。本当に生きた心地がしなかった。茶色く濁った川の水は、つり橋の少し下を流れてい



大滝付近

た。誰もひとことも喋らなかった。白屋地区は、今では自動車でも行けるが、当時は急な坂道を歩いて登るしかなく、怪我人を戸板に乗せて、担いで登った。当時第二小学校があったところから、国道に通ずる橋があった（今は橋も小学校もない）。その橋を渡って、国道を少し行くと、西谷橋があったが、それも流失して、なくなっていた。西谷は、この前の台風（平成23年紀伊半島大水害）で山が崩落して、今も工事中である。その西谷の上の山を横切って、下道にいたり、山を下って診療所に着いた。朝から上多古を出て、診療所に着いたのが午後の4時頃だった。また来た道を歩いて帰った。怪我をした友人は、その後、尼崎の病院へ移って、片足を切断して、上多古の家へ退院して戻り、数十年前に亡くなった。わしにとっては悲しい伊勢湾台風の思い出の1つである。

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

す。川上村での確認例は現時点では非常に少ないですが、今後調査が進めば、多産する地域がいくつも見つかるかもしれません。なお、本種は繁殖に関する詳細など不明な点も多いヘビです。

(2) ヒバカリ (ナミヘビ科)

成体の体長は40～60cm。背面は褐色ないし、赤っぽい褐色で、顎から首の背面にかけて黄白色の帯状の斑紋のあるのが特徴です。詳しく見れば、背面中央に青みを帯びたボカシがかかっており、多くの場合、不鮮明な斑点がありますが、川上村のヒバカリには、斑紋が大きくてクッキリと目立つ個体が多く見られます(写真5、6)。しかし、いずれにしても、本種は小型であることから、人目につきにくい地味なヘビと言えます。

本種は少し湿っぽい場所や、曇天や夕暮や木陰など、少し暗いところを好み、水辺を離れない習性が見られます。例えば、人と出合ったとき、他のヘビは陸地の茂みの方へ逃げるのに対して、ヒバカリは必ず水のある方向へ逃げ、水中に潜って姿を消すこともあります。また本種の食性も水辺や水中にいる小型のカエルやサンショウウオの仲間や、それらの幼生(オタマジャクシ)や、小型の魚を捕食する一方、ミミズも食べる幅広い食性の持ち主です。このようなことから考えれば、ヒバカリにとって吉野川の源流域は格好の生息環境と思われます。本種の分布は本州、四国、九州で、5～6月に交尾し、7～8月に産卵し、8～9月に孵化するのが通常です。孵化したばかりのヒバカリは15mm位です(写真7、8)。

なお、ヒバカリの名前は、毒ヘビと間違われて恐れられ、本種に噛まれると、「その日ばかりの命」と言われた迷信に由来すると言われていています。本種は追い詰めると威嚇行動をとりますが、咬みつくことのない、まったく無毒のおとなしいヘビです。以上でヒバカリとタカチホヘビの紹介を終わりますが、次の号をどうぞお楽しみに。



写真4. ミミズを捕食している幼体
(背面は黒く、ミミズ食のため、口が小さい)



写真5. ヒバカリ成体(一般に見られる体色)



写真7. 孵化して脱出のチャンスをうかがう幼体



写真6. ヒバカリ成体(川上村で多く見られる大きな斑紋の個体)



写真8. 孵化したばかりの幼体



川上村のヘビについて

森と水の源流館では平成25年の巳年に「川上村のヘビについて」と題して、知名度の高いマムシ、ヤマカガシ、シマヘビ、アオダイショウ、この4種を本誌上で紹介しました。川上村には8種類のヘビが生息していますので、今回は残りの4種、タカチホヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ジムグリを紹介します。これらは、前回紹介した種と比べると、人目につきにくいので、多くの人たちにとっては珍しいヘビばかりです。人目につきにくくても源流の主役の一人であることに変わりはありません。まずは本号でタカチホヘビとヒバカリを、次号でシロマダラとジムグリを紹介します。



井手 泉（源流人会会員）



珍しいヘビたち4種の概要

(1) タカチホヘビ（ナミヘビ科）

タカチホヘビは日本本土のヘビの中では、次に紹介するヒバカリと並んで最も小型です。成体の体長は30～60cmです。一目でわかる本種の特徴は、透明感のある褐色ないし黄褐色の背中に1本の細い黒い筋が縦に通っていることです。ただし、幼体の背面は黒いので、この黒い筋は見えませんが、鱗の構造が他種とは異なり、光の当たり具合によって、青く照り光るためにすぐ本種であることがわかります。本種は成長するにつれて、黒い色素は減少し黄色の色素が増加しますので、中には黄金色に輝く個体もあります（写真1、2、3）。このような強い光沢のある鱗を持つヘビは、日本本土ではタカチホヘビだけです。本種の独特の美しさは、この鱗の構造によるものですが、そのために乾燥と高温に弱く、適度の湿り気と暗くて涼しい場所でないと、すぐに弱り、やがては死んでしまう大変デリケートなヘビです。なお、顕著な特徴の一つは、頭部が細長く、目が小さく口も小さいことです。これは、本種の地中性で夜行性という生態や、ミミズ食という狭食性に起因する形態的特徴と考えられます（写真4）。

本種は、日中は落葉の堆積、木片や瓦礫の下などに潜み、夜間に活動するため、昼間に見ることは滅多にありません。しかし、夜道で車に轢かれた死体と日中に出会うことは時々あります。本種は本州、四国、九州に分布し、地域により個体数の多いところもあれば、非常に少ない所もありま



写真1. タカチホヘビ成体
(光の加減で透明感のある鉛色に見える)



写真2. 黄金色のタカチホヘビ成体



写真3. 光の加減で七色に見えるタカチホヘビ成体

その二二

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

土倉翁造林頌徳記念碑

岸壁に文字を刻んだ石碑を磨崖碑とい
います。奈良県内には宇智川磨崖碑（五
條市 776年）や教科書にも出てくる
正長元年柳生徳政碑（奈良市 1428
年）などが知られていますが、川上村に
も巨大な磨崖碑が作られています。

川上村西河地区と大滝地区の境、国
道169号線から吉野川右岸を眺める
と、「鎧掛岩」という切り立った絶壁の
中央に「土倉翁造林頌徳記念」という文
字が見えてきます。これは土倉庄三郎
（1840～1917）の業績を記念す
るため、東京帝国大学（現東京大学）教
授の本多静六（1866～1952）の
呼びかけで作られた磨崖碑です。

本多静六は明治神宮社叢の設計にも関
わった有名な林学者で、若いころは土倉
家に寄宿しながら林業を学び、庄三郎の
指導を受けながら間伐も行ったそうで
す。大正9年（1921年）庄三郎没後
3年目）、庄三郎が「記念林として長く
残す」と言っていた山林が伐採されてい
るのを目の当たりにした静六は、庄三郎
が林業振興に果たした功績を記念する石
碑を作ることを決意しました。当初は個

人で作ろうとしていたようですが、見積
もりしたところ資金が足りないことが分
かりました。そこで川上村をはじめ、北
村又左衛門・北村宗四郎・阪本仙次といっ
た実業家に協力を依頼し、74日を要して、
大正10（1922）年5月30日に完成さ
せました。

一文字のサイズは約1.8m、磨崖
碑全体の大きさは約26mになります。
文字は書家で言語学者の後藤朝太郎
（1881～1945）が揮毫しました。
集めた資金は1,850円。現在の貨
幣価値ではどのくらいか正確には分ら
ないのですが、初任給と比較すれば約
500～700万円といったところで
しょうか。費用内訳は用紙代12円50銭・
墨汁代64銭・揮毫代100円8銭・足

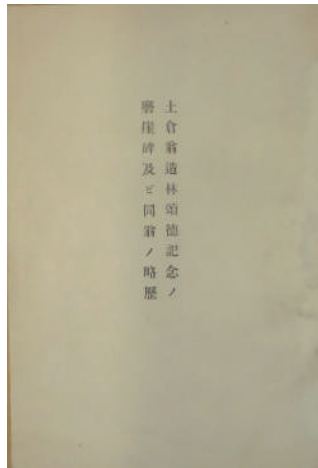


写真1 『土倉翁造林頌徳記念ノ磨崖碑及ビ同翁ノ略歴』

場代850円・彫刻費
800円・写真代17円
でした。69円98銭余っ
たので、本多静六は『土倉翁造林頌徳記
念ノ磨崖碑及ビ同翁ノ略歴』という16頁
の小冊子を製作しました。この冊子が土
倉庄三郎の最初の伝記になります。
この年の10月、大日本山林会31回大会
が奈良県で行われました。エクスカー
ションは吉野林業視察旅行で、多くの林
業関係者が川上村を訪れています。その
記念誌には、庄三郎の銅像の前で行われ
た解散式の様子のほか、磨崖碑の写真が
載せられ、庄三郎の功績を知らしめる目
的を果たすことが出来たとと言えるでし
ょう。

この磨崖碑は、コケや灌木で覆われて
文字が見えにくくなると、その都度清掃
が行われています。特に平成20年と26年
は、土倉庄三郎の曾孫でロッククライ
マーの土倉大明さんが手掛けました。

今年には庄三郎百回忌の年で、6月19日
に催しが行われる予定ですので、ぜひ当
初の姿が蘇っている磨崖碑も見に来てく
ださい。



写真2 完成直後の磨崖碑
（『土倉翁造林頌徳記念ノ磨崖碑及ビ
同翁ノ略歴』所収）

参考文献

本多静六『土倉翁造林頌徳記念ノ磨崖碑
及ビ同翁ノ略歴』（非売品） 1922年
田中淳夫『森と近代日本を動かした
男・山林王・土倉庄三郎の生涯』洋
泉社 2012年
大日本山林会『大日本山林大會 大
和之印象』藤田三思堂 1922年
週刊朝日編『値段の明治大正昭和風
俗史』朝日新聞社 1984年ほか



写真3 磨崖碑の文字の実物大模型「土」
（NPO 法人芳水塾製作）



①世界遺産はどんなものさし

ユネスコの登録する「世界遺産」という言葉を知っている人は多いと思います。しかし、その中に、自然遺産と文化遺産という2つのカテゴリーがあることを意識している人は少ないかもしれません。日本にはありませんが、複合遺産というカテゴリーもあります。これについては特に説明する必要もないかもしれませんが、文化遺産は顕著な普遍的価値をもつ建築物や遺跡など、世界遺産は顕著な普遍的価値をもつ地形や生物多様性、景観などを備える地域などが指定されています。日本では19の世界遺産が登録されていますが、そのうち自然遺産はわずか4カ所しかありません。この数字を見ると、日本の自然は国際的に評価が低いと考える人がいるかもしれません。

状況では、世界遺産への登録のハードルは高そうです。「兎追いしかの山」と歌われるような日本の美しい原風景は、自然遺産のものさしによると未来に引き継ぐほどのものでもないのでしょうか？

②ユネスコエコパークとは

ユネスコの自然を守るものさし(基準)は、世界遺産だけではありません。現在は、ユネスコが世界を守るために登録しているものさしは3つあります。すなわち、「世界自然遺産」、「ジオパーク」、そして、川上村も含めた地域が指定されている「生物圏保存地域(国内呼称…ユネスコエコパーク)」です。ジオパークは地形地質など大地の遺産を守るために登録されています。

今回のテーマ、ユネスコエコパークは、正式には生物圏保存地域といえます。難しい表現で、これまで国内で浸透しなかったのが、最近では国内呼称、ユネスコエコパークが広く用いられるようになりました。どんなところが指定されているか簡単に表現すると、世界自然遺産が人の手の入っていない原生的な自然を指定するのに対し、ユネスコエコパークは、

人と自然が上手にお付き合いしている地域が指定されます。

世界自然遺産よりこのユネスコエコパークの方が、古くから自然と上手にお付き合いをしてきた日本にとっては、世界に日本の価値を知ってもらうためにもふさわしくなじみやすいものさしになると考えられます。現在、世界では651地域が、国内では7地域が指定されています。

ユネスコエコパークは「核心地域」(原生的な自然が守られる場所)、「緩衝地域」(核心地域の周辺で緩衝機能を果たし、エコツーリズムや環境学習などが行われる地域)、「移行地域」(自然と人が経済活動を通じてなかく暮らせる場所)の3つにゾーニングされます。



11月1日には大台ヶ原・大峯山ユネスコエコパークシンポジウムが 権原市で開催されました



③大台ヶ原・大峯山ユネスコエコパーク

川上村を含む大台ヶ原・大峯山ユネスコエコパークでは、古くからの持続可能な木材生産を可能とした吉野林業、北山林業などの産業や暮らし、信仰などにより、人と自然の共生を図ってきました。そのため、奥山では原生的な自然が守られてきた地域です。

1980年にすでに登録されていましたが、2015年8月にユネスコ国内委員会より、エリアの拡張申請についてユネスコに推薦され、2016年3月にペルーで開催されるユネスコMAB計画国際調整理事会において、拡張登録の可否が決定される予定です。この拡張申請に伴い、川上村、上北山村、天川村、大台町の全域、五條市、十津川村、下北山村の一部がユネスコエコパークとなります。なお、拡張後は、「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」の呼称となる見込みです。(次頁に続く)

④ ユネスコエコパークになったらどうなるの？

ユネスコエコパークになると「保存機能」「学術的研究支援」「経済と社会の発展」が3つの機能が上手に絡んでいくことが大切です。保存機能と違って、そのまま人がさわらずにするだけでなく、これまでの地域の知識や経験を活かし、社会的・経済的発展もしながら自然を守る、維持するということになりま

す。当然、川上村では、持続可能な林業を中心に自然と人が関わってきたわけですから、林業の振興も大きなテーマになるでしょう。他地域の事例では、有機栽培など厳格に管理された品質のもののみが付けることのできる商標をつくり、上手に産業の発展に活用している事例などがあります。「ユネスコエコパークで生産されたもの『環境にやさしい』というイメージはヨーロッパなどでは定着したようですから、上手に活用していきたいものです。

また「学術研究支援」は、地域と学術界が相互に支援しあって、地域の宝物を発見し、守り、活用する基礎をつくっていくものです。地域の宝を光らせることで、地域住民の誇りを持ってもらうことも大切なことです。

森と水の源流館でも、これらの機能に注視しながら、環境教育や研究の場として、ますます川上村を光り輝かせたいと思います。

(木村全邦)



源流学の森づくりとは、20年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。源流人会会員さんをはじめ、多くの方々が関わってきました。林業に携わったことのない人がほとんどです。立ち枯れた大径木や急斜面に生えている木、重心が大きく偏った木、他の木にもたれかかるように倒れた木（かかり木）などを伐るのは危険性が高いため、我々では作業できません。森が広すぎて作業が追いつかないという理由もあります。そこで、専門家に依頼することもあります。



台風後折り重なるように倒れた木



作業道の補修

十人十色ではなく、十本十色。木の種類も大きさも堅さも枝振りも立っている場所も様々な木を伐る作業を見ていると、改めて難しい仕事と熟練が必要なのだと思えます。ある程度、整備してもらった後はまたみんなで協力して森づくりの作業です。安全第一！ 専門家に指導してもらったりもしながら、私たちにできる範囲のことをしています。素人から玄人までたくさんの方がかわって、この森づくりは少しずつ進んでいます。元どりの森に戻るまでまだまだ先は長いです。



数年前までは重機で林道を修理

源流人募集



源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金

にご協力ください



ありがとうございました。

平成26年度、166,590円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学

4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

表紙の写真：コハコベの花。よく見ると、なんと花びらの形が深く切れ込んだハートマーク！

発行日：平成28年3月発行

発行所：公益財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館 TEL:0746-52-0888